



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

Viennese Jewish sportspersons who survived from Nazi regime to postwar : Focusing on Vienna city in 1945

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 明哲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174470

ナチ支配下を生き延びたユダヤ人スポーツ関係者の戦後

— 1945年のウィーンを中心に —

鈴木 明哲*

健康・スポーツ科学講座

(2022年6月13日受理)

SUZUKI, A.: Viennese Jewish sportspersons who survived from Nazi regime to postwar: Focusing on Vienna city in 1945. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences, 74: 75-86. (2022) ISSN 2434-9399

Abstract

This paper considers the stories of Viennese Jewish sportspersons who survived the Nazi regime and devoted themselves to re-establishing the Viennese Jewish sports activities after the Second World War. After Nazi Germany annexed the Austrian First Republic (1918-1938) on 13 March 1938, the Nazis closed the Viennese Jewish sports club, SC Hakoah Wien, forcibly ending the club's sports activities. In order to understand the difficulty of reconstructing the Jewish sports activities and club after the Second World War, it is important to clarify the fates of the Jewish sportspersons under the Nazi regime. This paper specifically focuses on the stories of the Viennese Jewish sportspersons who returned from the Nazi concentration camps and those who remained in Vienna throughout the war. These individuals were not only selected because they experienced difficult circumstances during the war, but they also succeeded in re-establishing their sports activities and club after the war. Based on this historical background, it is possible to understand the true difficulty of redeveloping the Viennese Jewish sports activities and club after the Second World War.

The results of the considerations are summarized follows:

Based on the findings, a total of 38 Jewish sportspersons hardly worked for re-construction of Jewish sports activities and club in 1945. This paper, however, was unable to identify where 24 Jewish sportspersons lived during the Nazi regime. 12 Jewish sportspersons returned from the Nazi concentration camps, while two persons lived in Vienna throughout the Nazi regime.

Despite the findings, there are several limitations in this paper that should be noted. First, the collection of the stories of the Jewish sportspersons under the Nazi regime was almost entirely based on previous studies. Second, the stories of 24 Jewish sportspersons are still unknown, with many Jewish footballers during the Nazi regime unidentified. Thus, the findings need to be carefully interpreted. However, the results still emphasize that many Jewish sportsperson went through many hardships in order to survive under the Nazi regime. As for the case of M. Scheindl and E. Feingold, who were detained at extermination camp Auschwitz and returned safe to Vienna in 1945. But the question remains regarding the true intention of their enthusiasm for reconstructing a Jewish sports activities and club.

Keywords: Jewish sportspersons, after the Second World War, Vienna, Nazi regime, Nazi concentration camps

* 東京学芸大学 健康・スポーツ科学講座 体育学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

Department of Health and Sports Sciences, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要 旨

本稿は、ナチ支配下を生き延びたユダヤ人スポーツ関係者自身による戦後におけるスポーツ活動とスポーツクラブの再建への営みについて考察したものである。1938年3月13日、ナチドイツがオーストリア第一共和国（1918-1938）を併合した後、ユダヤ人スポーツクラブ、SCハコア・ウィーンを閉鎖し、強制的にそのスポーツ活動を停止した。第二次世界大戦後におけるユダヤ人のスポーツ活動とそのクラブの再建という困難さを理解するためには、ユダヤ人スポーツ関係者がナチ支配下においていかなる運命にあったのかを明らかにすることが重要である。それゆえ本稿では、特にナチスの強制収容所から生還したユダヤ人スポーツ関係者と戦時下もずっとウィーンに留まり続けていたユダヤ人スポーツ関係者に焦点を当てている。彼らは戦時下において、とても困難な環境を経験させられたにもかかわらず、戦後は自らの手によってスポーツ活動とスポーツクラブの再建を果たした。このような彼らの歴史的背景を理解することにより、ユダヤ人スポーツ関係者の戦後におけるスポーツ活動とスポーツクラブの再建の真の困難さを理解することができる。

考察の結果は以下のようにまとめられる。

本稿に基づくと、合計38人のユダヤ人スポーツ関係者が戦後、困難に満ちたスポーツ活動とスポーツクラブの再建に従事していたことが明らかとなった。しかしながら、本稿では、そのうち24人のユダヤ人スポーツ関係者のナチ支配下における動静について明らかにすることができなかった。戦後の再建に従事した12人のユダヤ人スポーツ関係者はナチスの強制収容所からの生還を果たし、また2人はナチ支配下のウィーンを生き延びて戦後の再建に従事していた。

本稿における限界性についても言及しておきたい。第一に、ナチ支配下のユダヤ人スポーツ関係者の動静について収集した資料のほとんどを、先行研究に依拠していたことである。第二に、24人のユダヤ人スポーツ関係者の動静についてほとんど明らかにできていない点であり、その多くはサッカー選手であったことである。それゆえ、引き続き資料の発掘に努める必要がある。しかしながら、結果としてナチ支配下を生き延びるためにユダヤ人スポーツ関係者がいかに多くの困難を乗り越えてきたかを強調しておきたい。例えばアウシュヴィッツ絶滅収容所からの生還を果たしたシャインドルとフィンゴルトのケースなどである。だが、なぜユダヤ人スポーツ関係者がスポーツ活動とスポーツクラブの再建に熱意を持って取り組んでいたのか、その真意については疑問のままであり、今後の大きな課題である。

キーワード：ユダヤ人スポーツ関係者、第二次世界大戦後、ウィーン、ナチ支配下、ナチス強制収容所

はじめに

1938年3月13日、オーストリア第一共和国は、ナチドイツに併合され（Anschluß）、1918年からの歴史に幕を閉じた。一方、「1933年にヒトラーが政権を獲得してはじまったユダヤ人弾圧政策は、当初、ドイツからユダヤ人を『追放』することであった」¹⁾が、やがて「1941年10月から、ラインハルト作戦がはじまる」²⁾と絶滅収容所の起動が開始し、「1942年1月に行われたヴァンゼー会議によって、ナチ・ドイツによるユダヤ人問題の『最終解決』は、計画的な大量殺戮、つまり『根絶』と確認され」³⁾、最終的に「およそ600万人のヨーロッパのユダヤ人」⁴⁾が強制収容所や絶滅収容所で命を落とした惨劇となってしまった。いわゆる「ホロコースト (holocaust)」である。

併合により第三帝国と同様、ウィーンのユダヤ人にも弾圧政策がおよび、1938年から1941年の間に合計12万6500人がオーストリア以外のナチ支配が及んでいないヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、中米、南米、パレスチナなどへと移住し、また4万3421人がウーチ (Lodz)、リガ (Liga)、ミンスク (Minsk)、テレージエンシュタット (Theresienstadt)、そしてポーランド国内へと移送された。1938年から1941年の間で、すでにおよそ1万3千人が強制収容所で命を落とし、またこの期間、ウィーンにとどまっていたユダヤ人はおよそ1250人であった⁵⁾。また、1938年3月の併合直後、ウィーンのユダヤ人の人口は、16万7249人であったが、1945年4月15日には、その数はわ

ずかに5512人に過ぎなかったという⁶⁾。

こうした歴史的状況は、当時のウィーンにおけるユダヤ人スポーツ界にも及んでおり、1938年3月の併合後、ナチスはユダヤ人スポーツクラブ、ハコア・ウィーン（SC Hakoah Wien）を強制的に解散に追い込み、そのスポーツ活動を停止させた。ナチ支配下にあったオーストリアでは、37人のユダヤ人スポーツ関係者が殺害され、そのほとんどはサッカー関係者であった⁷⁾。

先述したように1945年4月15日の時点で、ウィーンにいたユダヤ人は、わずかに5512人で、併合直後の16万人から大きくその数を減らし、スポーツ活動は言うまでもなく、その生活の再建は困難を極めたであろうことは想像に難くない。多くの先行研究では、ウィーンにおける戦後のユダヤ人スポーツクラブの再建開始時期を1945年5月20日としているが⁸⁾、やはりこの再建もかなりの困難を極めたであろう。多くの同胞は国外に避難し、強制収容所で命を落とした者もいた中、限られた人々によって再建が開始された。それは当然、戦時下を乗り越えてきたオーストリア人、あるいは日本人がスポーツ活動の再建に取り組むのとは、自ずからその厳しさが大きく異なっていた。例えば「オーストリアは、民族対立で分裂気味の多民族国家であり、民族排外的な反ユダヤ主義が興隆した」⁹⁾とされているが、こうした風潮は併合後はもとより、戦後も続いており、彼らユダヤ人スポーツ関係者は反ユダヤ主義の罵声を受けながらのプレーを余儀なくされていた¹⁰⁾。

戦後最初の10年間におけるハコア・ウィーンの復興（Wiederbelebung）を叙述したルーカスの研究によると、ユダヤ人スポーツ関係者は、来る1945年6月10日にウィーン1区のカフェ・レヒナー（Lechner）で伝統的クラブの復興を告知するための準備を、同年5月に整えはじめていた¹¹⁾。ルーカスの研究は、1945年5月以降、多くの元ハコア・ウィーンの関係者らが戦後のユダヤ人スポーツ活動の復興に着手していた様子を、関係者の名前を示しながら明らかにしつつ、加えて1938年の併合後、ナチ支配下、それらの関係者がどのように過ごしていたのかについても若干言及している。その記述を参照すると、併合後の関係者の動静は、強制収容所に移送され、抑留されたケース、ウィーンに留まり続けたケース、そして併合以前から枢軸国以外の国外へ逃れて生活していたケースの、およそ三通りに分けることができる。併合以前から身の危険を察知して国外へ退避することができた関係者に比べて、強制収容所やウィーンで生き延びた関係者は、自らの意思で移動や生活することがままならず、計り知れない困難や苦しみに見舞われたことと思われる。

本稿では、ルーカスの研究を参照しながら、新資料を加えつつ、ナチ支配下におけるユダヤ人スポーツ関係者の動静、戦後ウィーンに帰還した月日の特定などの史実を体系的に整理しながら考察していくこととする。ナチ支配下におけるユダヤ人スポーツ関係者の動静を明らかにすることは、いかに彼らが苛烈な歴史的状況を生き延びたかを理解することにつながり、そしてウィーンに帰還した月日の特定をすることにより、戦争終結直後からスポーツ活動の再建に従事し始めたという、彼らのスポーツへの熱意をつかみ取ることができると考えられる。本稿の目的は、このようなところにある。

研究対象の期間は、1945年5月から1945年9月までとする¹²⁾。その理由は、1945年4月13日に首都ウィーンが解放され、4月27日には暫定政府が誕生したこと、そして同年9月にはハコア・ウィーンが市当局に対し、1938年の解散取り消しを申請するところまでクラブの組織力が回復し¹³⁾、さらにはサッカー部門が9月開始の2部リーグに参加できるところまでチーム力を上げてきたことに依拠している¹⁴⁾。

論述の手順は、ユダヤ人スポーツ関係者各々について、1945年5月から時系列順に叙述し、彼らそれぞれが、順次ウィーンに帰還しながら、徐々にスポーツ活動再建に従事していった様子を描いていく。そして特定することができた個々の強制収容所及び絶滅収容所についても、ホロコースト研究の説明を引用し、ナチ支配下におけるユダヤ人スポーツ関係者の苛烈な状況を理解する助けとする¹⁵⁾。

本稿において使用した資料は、新聞や月刊誌である。主に使用したオーストリアの新聞である*Neues Österreich* (NÖ) は、1945年4月23日、戦後新たに発刊され、反ナチズム、反ファシズムを掲げ、国民党（*Österreichische Volkspartei*）、社会党（*Sozialistische Partei Österreichs*）、共産党（*Kommunistische Partei Österreichs*）それぞれからの代表者によって編集母体が組織されていた¹⁶⁾。政治的中立性を保っており、ユダヤ人の動静を把握するには第一に閲覧する必要がある資料と考えた。さらに社会党系の新聞*Arbeiter Zeitung*や在オーストリアのアメリカ占領軍が発刊していた*Wiener Kurier*、ニューヨークにあるユダヤ人協会が発刊していた月刊誌*Aufbau*などにも僅かながらユダヤ人スポーツ関係者の動静に関する記事が見つかったので使用した。またハコア・ウィーンの関係者の筆による『ハコア50年史-1909-1959-』の人名録も活用した¹⁷⁾。

1. ハコアの“ライヒ (Reich)” (1945年5月1日)

先述したようにこれまでの研究では、戦後のユダヤ人スポーツクラブの再建開始時期を1945年5月20日としているが、本稿では、それよりも早くユダヤ人がウィーンにおいてスポーツをしていた史実を突き止めることができた。それは、1945年5月1日、ウィーンにおける戦後最初のサッカーの試合に、あるユダヤ人サッカー選手が参加していたことを報じた新聞記事の存在から明らかとなった。

祝日の賑わいの中で時間的にも設定が難しかったにもかかわらず、サッカーの試合は行われた。この試合の実現はとても厳しかったが、それにもかかわらず強力なチームを参加させることができ、かなりの数のソビエト軍兵士と将校を含む大観衆の熱狂の中で実施された。

特にオッタークリンク (Ottakring) のヘルホルト・プラッツ (Helfort-Platz) が沸いたようで、そこでは往年の名プレーヤーによるかつての卓越した、それでいて今尚、色褪せない技量を見ることができた。観衆は有名なゴールゲッター、ウリディル (Uridil) を見て、歌った。さらにはラピド (Rapid) のヴェアゼリク (Weaselik) とレーレ (Rölle), ハコア (Hakoah) のライヒ (Reich), シュポルトクルブ (Sportklub) のミットフィルダー、フックス (Fuchs) 等々¹⁸⁾。

この記事の中にライヒという名前が記されていたが、彼はハコア・ウィーンのメンバーで、間違いなく戦後最初にウィーンで、スポーツに興じたユダヤ人であった。また、戦後最初にウィーンで行われたサッカーの試合に参加していたメンバーの一人でもあった。この史実は、ユダヤ人サッカー選手が、ウィーンで戦争終結直後 (解放直後) にプレーしていたことにほかならない。ナチ支配下を生き延びたユダヤ人スポーツ関係者の戦後を考えたとき、なぜ彼は、こんなにも早くスポーツ活動を再開することが可能であったのか。そもそもこの時期に、なぜウィーンにいたのか、どのようにナチ支配下を生き延びることができたのか、疑問は尽きない。

ライヒという名前だけを手がかりに先行研究を紐解いていくと、フォルスターとジュピターラーの論文の中に、“オスカー・ライヒ (Osker Reich)” というユダヤ人サッカー選手についての記述がある。

そのオスカーは、1938年までハコア・ウィーンのカンヌ (Cannes) というサッカークラブと一年契約に署名したことにより、フランスへの出国ビザを取得し、オーストリア国外へと逃れていた。フランス当局は、1939年9月から12月までの間、ライヒをアンティーヴ (Anribes) のスタジアムに收容し、その後、1ヶ月ほどレ・ミル (Les Milles) 收容所に拘留していた。そんな中、1940年7月、ライヒはヴィシー政権下の「自由地域 (freie Zone)」に辿り着き、南フランスの地でサッカー選手としての仕事に専念することができ、1942年5月までオリムピック・ニーム (Olympique Nimes) というチームでプレーした¹⁹⁾。

1943年10月初旬、ライヒは、ASアヴィニョン (Association sportive Avignon) でプレーしていたが、マルセイユとアヴィニョンの警察は、彼を逮捕し、ドランシー (Drancy) 收容所に収監した²⁰⁾。彼はアウシュヴィッツ (Auschwitz) に移送されることを恐れ、收容所内ではナチス親衛隊 (SS=Schutzstaffel) の下働きに精を出した。暫くするとライヒは、ユダヤ人收容所警察 (jüdischen Lagerpolizei) のチーフとなり、1944年から收容所の外で「ユダヤ人摘発 (ユダヤ人狩り Judenaushebung)」に従事するようになった。ライヒが收容所警察のチーフに任命されたのは、彼がかつて有名なサッカー選手であったことを親衛隊将校らが知っていたからだと思っていた。1944年8月には故郷のウィーンに戻り、ナチス親衛隊の通訳として働いていた。やがて戦後になると、1946年2月、ライヒの身柄はフランスの裁判所に引き渡され、1949年2月8日、パリの軍事法廷より死刑判決を受けた後、1949年7月5日、ライヒはフランス警察の銃殺隊によって死刑になった²¹⁾。

以上がライヒに関するスポーツ史的叙述であるが、その一方で彼に関しては1938年から1945年の間のユダヤ人の行方を左右した人物としても描かれており、その代表がラビノビッチの研究である。

その研究によると、オスカー・ライヒは、1914年にウィーンで生まれ、有名なサッカー選手であったが、1938年にフランスへ逃れ、1943年10月初旬、ゲシュタポによってドランシー收容所に収監された。彼は、自身がアウシュヴィッツに移送されないための自衛策としてナチス親衛隊に協力し、「ユダヤ人摘発」などにも手を染めていたが、ナチス親衛隊のヨーゼフ・ヴァイツル (Josef Weiszl) と共にユダヤ人の選別を指揮していた。ヴァイツルは、ドラ

ンシー収容所でアウシュヴィッツへの移送を組織しており、ライヒをアウシュヴィッツから遠ざけることができた。ヴァイツルは、ことのほかユダヤ人の摘発に熱心であった。1952年にパリの軍事法廷で懲役20年を言い渡されたが、1955年に釈放された²²⁾。ライヒは死刑になったが、ヴァイツルは戦後も生き延びることができたのである²³⁾。

また、1949年当時の新聞は、オスカー・ライヒについて、以下のように報じていた。

オスカー・ライヒは、1938年以前からハコアのサッカー選手であり、彼のポジションは左ウイングで、ヒトラー・エスタライヒになってから、フランスへ移り、そこでもサッカーを続けていた。彼は、戦争中、ゲシュタポのスパイ活動に加担していた。第三帝国崩壊後、彼はフランスから故郷のウィーンに逃げ帰ってきた。ドランシー収容所でのスパイ活動やそこで行っていたことについて、彼は誰にも気づかれないように願っていた。彼は、戦後、レッドスター・ウィーン (SC Red Star Wien) というチームで再びサッカーをしていた。ある日、彼は、レッドスターのサッカー場で試合観戦をしていたが、その時、かつての囚人 (ドランシー収容所の囚人と思われる) が彼の存在に気づき、その試合の最中、ずっと彼を見張っていた。だが、彼は逃れることができず、捕らえられ死刑執行となった²⁴⁾。

戦後すぐに、ライヒは、ハコア・ウィーンではなく、レッドスター・ウィーンに加わってプレーを再開したのであり、5月4日付の*Neues Österreich* が報じたような「ハコアのライヒ」ではなく、「レッドスターのライヒ」であった。そしてそれは、彼自身の過去を覆い隠すための策であったのかも知れない。このようにライヒは、ウィーンで戦後初めてスポーツをしたユダヤ人ではあったが、その後、ユダヤ人によるスポーツ活動の再興に貢献することなく、自分の罪から逃れることができずこの世を去った。

2. ユダヤ人スポーツクラブ再建への始動 (1945年5月20日)

多くの先行研究は、ユダヤ人スポーツクラブ再建の起点を1945年5月20日としている。関の声を上げたユダヤ人スポーツ関係者は誰であったのか。

Neues Österreich の5月20日の記事を一瞥すると、ハコア・ウィーンのメンバーであったルース・ヒルシュラー (Ruth Hirschler) がウィーンのスポーツ関係者、特にサッカーと水泳の関係者に向けてハコア・ウィーンの再建を助けて欲しいと呼びかけていたことがわかる²⁵⁾。彼こそが、戦後初めて、ウィーンでユダヤ人スポーツクラブの再建に向けて動き出した最初のユダヤ人スポーツ関係者であり、先述のライヒのように単発的にスポーツに興じたのと歴史的な意味が異なる。しかしながら、本稿では、このR.ヒルシュラーがナチ支配下にどのような生活をしてきたのか、強制収容所に収監されていたのかどうか、全く明らかにすることはできなかった。一体、彼はナチ支配下を、どこでどのように生き延びたのか、今後の課題である。

3. ハコア・ウィーン再建委員会の告知 (1945年6月14日)

1945年5月20日、新聞紙上に掲載されたR.ヒルシュラーの呼びかけが契機となり、翌月には以下のメンバーからなる再建委員会が組織された。6月14日のことであった。

会長：イザック・ブルーメンフェルト (Isaak Blumenfeld)

副会長：ハインリッヒ・ヒルシュラー (Heinrich Hirschler)

事務長：ハンス・ヴィンター (Hans Winter)

会計：ヨーゼフ・ベルガー (Josef Berger)

医師：シュテルン (N. Stern)

経理監査：イゴン・グリュン (Igo Grün)

アルフレート・チャルフォン (Alfred Chalfon)

理事：アルミン・ユングマン (Armin Jungmann)

審査委員：ブルーノ・ファイヤ (Bruno Fayer)

マックス・シャインドル (Max Scheindl)

ジークムント・ラウナー (Siegmond Launer)

サッカー部門：クルト・プラチェック (Kurt Platzek)

水泳部門：ルドルフ・ケーニツヒ (Rudolf König)

ルース・ヒルシュラー (Ruth Hirschler)²⁶⁾

14名の名前を確認できるが、現時点でナチ支配下の動静が判明していないのは、ベルガー、ヴィンター、シュテルン、グリュン、チャルフォン、ファイヤ、ラウナー、ケーニツヒ、先述のR.ヒルシュラーの9名である。

会長のブルーメンフェルトは、ナチス強制収容所²⁷⁾から帰還した元サッカー選手であった。副会長のH.ヒルシュラー、理事で元サッカー選手のユングマンは、ともにナチ支配下のウィーンを生き延びたユダヤ人であった²⁸⁾。H.ヒルシュラーとユングマンがなぜ強制収容所に移送されずにウィーンで暮らすことが可能であったのか、現時点ではわからない。考えられることは、彼らが"U-Boot"と隠語で呼ばれた地下組織メンバーの一員であった可能性である。ウンガルクラインの調査によると、ナチ支配下のウィーンでは、およそ800人以上の"U-Boot"が潜伏し、活動していたことが判明している²⁹⁾。あるいはナチスの意向を受けたユダヤ人代表者会議 (Nazi-inspired Jewish representative councils) のメンバーであった可能性もある³⁰⁾。いずれにせよナチ支配下の動静に注目するならば、両者は今後の研究成果が待たれる人物であることは間違いない。加えて1945年8月8日の新聞紙上では、ユングマンがハコア・ウィーンのサッカー部門を再建させた立て役者であると早くも評されており、これらの観点からも彼がキーパーソンであったことがうかがえる³¹⁾。

プラチェックについては、フォルスターとジュピターラーがオーストリア抵抗文書館の資料を駆使してナチ支配下の動静を明らかにしている。プラチェックは、1939年9月にフランスのランス近郊の街、ムールムロン・ル・グラン (Mourmeoln-le-Grand) で収容され、1940年1月外国人部隊 (Fremdenlegion) に雇われた。フランス敗戦後、1940年10月8日に武装解除され、占領されていなかった地方に避難し、サンテティエンヌ近郊のロシュ・ラ・モリエール (Roche-la-Molière) に佇んでいた³²⁾。1942年には、コレーズ (Corrèze)、ブリーヴ・ラ・ガイヤルド (Brive-la-Gaillarde) に移住し、その地でまだしばらくの間、サッカー選手として活躍していた。1943年7月には、フランスとイタリアの国境近くのオートザルプ (Hautes-Alpes) へと逃げたが、同年10月、遂に逮捕された。1944年1月には、フランス国境近くドイツのザールブリュッケン (Saarbrücken) にあったノイエ・ブレンゲシュタポ強制収容所 (das Gestapo-Lager Neue Bremm) に移送され、さらにそこから1944年3月には、ウィーンのローサウワーレンデ (Roßauer Lände) にあった警察留置所に移送され、そこに留置されたままとなった³³⁾。つまり彼は、フランスに逃れたが、捕らえられ、ウィーンへと移送され、留置所で1945年の戦後を迎えたと考えられる。

1945年8月8日の新聞は、快活としたプラチェックの様子を以下のように伝えている。

ハコアの有名なサッカー選手、プラチェックが、つい最近、フランスから戻ってきた。現在、36歳の彼は、4年にわたる厳しい収容所生活を経験してきたにもかかわらず、まだまだ有能なスポーツマンである。レッドスターとのゲームでもハコアの若いチームに有益な助言を授けていた。びっくりするほどハコアのイレブンは若返り、これについてはオールドメンバーであるユングマンの貢献大である。水泳、陸上競技、卓球、旅行の各部門もすでに動き始めている。トレーニングは、ハコア・プラッツ (Hakoah-Platz) が空爆で使えなくなってしまったので、ヴァック・プラッツ (WAC-Platz) で行っている³⁴⁾。

おそらく当時は、プラチェックがウィーンの警察留置所にいたことは把握しておらず、彼がフランスから帰還したと思われていたようである。

シャインドルもサッカー選手で、アウシュヴィッツやザクセンハウゼンの強制収容所から帰還していた³⁵⁾。

4. ハコア・ウィーン、サッカー部門の再始動

4. 1 戦後初の親善試合 (1945年7月15日)

1945年7月15日、ハコア・ウィーンにとって戦後初のサッカーの親善試合が、3000人以上の観客が見守る中で、

ヴァッカー・ウィーン (Wacker Wien) との間で行われ、ハコアは2対5のスコアで敗れた。この試合を報じた新聞記事には、カルベルガー (Karberger)、シュレヒタ (Schlechta)、ハジュシュカ (Hajduschka)、シュタイン (Stein) そしてプラチェックという5人の名前が確認できる³⁶⁾。だが、ルーカスによる先行研究やパールの著作を参照してもプラチェックを除く4人のナチ支配下の動静、ファーストネームなどを特定することはできなかった。

4. 2 戦後2回目の親善試合 (1945年7月22日)

戦後初の親善試合が組まれてから1週間後、2回目の親善試合が、およそ1500人の観衆を集めてFCウィーンとの間で行われ、2対4でまたしてもハコアは破れ、2敗目を喫した³⁷⁾。新聞記事からヴェーバー (Weber)、バーグル (Bergl)、デュレク (Durek)、ゴロビック (Golobic)、コチアン (Kozian)、ゼメンスキー (Sezemski)、リーグラ (Riegler) ら7人の名前を確認することができたが、本稿では、彼らのナチ支配下の動静およびファーストネームを特定することはできなかった。

5. E.アルトマン (1945年7月22日)

1945年7月22日の新聞には、ハコア・ウィーンの卓球選手であったE.アルトマン (Egon Altmann) が、ナチス強制収容所から帰還したと記されている³⁸⁾。卓球オーストリア代表の監督にも招集されていた³⁹⁾。

6. コリッシュ兄弟 (1945年8月5日)

1945年8月5日の新聞は、アルトゥーアとジークフリートのコリッシュ (Kolisch) 兄弟がナチスの強制収容所からウィーンに帰還したことを報じていた⁴⁰⁾。ユダヤ人系の月刊誌、*Aufbau*によると、コリッシュ兄弟はチェコスロバキアのテレージェンシュタットの強制収容所に収監されていた⁴¹⁾。

アルトゥーアは、サッカーの著名なトレーナーであった。8月5日の新聞によると、噂では彼はすでに死亡したと思われていたが、クロアチアのフィウメ (Fiume: Rejekaのイタリア語表記) で健在であった⁴²⁾。9月5日の新聞にはナチ支配下の動静が報告され、アルトゥーアはフィウメにいて、グラーツを経て再びウィーンに戻り、9月5日の時点で足を怪我していたが、すでにオーストリアサッカー協会にも帰還したことが告げられていた⁴³⁾。やがて1946年4月にアルトゥーアは、オーストリアサッカー協会の国際関係部局の役目を引き受けることになった⁴⁴⁾。ユダヤ人スポーツの再建のみならず、オーストリアのスポーツ再建にとっても欠かすことのできなかった重要な人物であったことがわかる。

建築家でもあったジークフリートは、ファースト・ビエンナ (First Vienna Cricket and Football Club) というスポーツクラブの有名なサッカー選手で、中盤の攻撃的プレーヤーであった⁴⁵⁾。A.パール執筆の『ハコア50年史-1909-1959-』によると、ジークフリートは、やがてハコア・ウィーンのメンバーに加わり、キャプテンも務め、代表チームに招聘されたこともあるハコアを代表するプレーヤーであった。それだけでなく、彼は第一次世界大戦にも参戦し、砲兵士官として砲兵中隊を指揮し、多くの勇敢褒章を授与された。復員した彼は、スポーツから身を引き、建築の仕事に従事した⁴⁶⁾。1945年以後は、ハコアのスキークラブやツーリストクラブの再建に尽力した⁴⁷⁾。

先述のユダヤ人系月刊誌、*Aufbau*によれば、コリッシュ兄弟はナチ支配下をテレージェンシュタットで過ごし、生き延びたことが判明しているが、とりわけ弟のジークフリートに関する当地での動静が、ラビノビッチの研究に叙述されている。テレージェンシュタットでジークフリートがどのような活動をしていたのか、それには彼が第一次世界大戦に従軍したことが大きく関わっていた。ジークフリートは、1941年の夏頃からテレージェンシュタットで「戦争犠牲者連盟 (Verbandes der jüdischen Kriegsoffer)」のリーダーを務め⁴⁸⁾、「国外移住救援活動 (Auswanderungs-Hilfsaktion)」のためのリスト作成に従事していた⁴⁹⁾。当時、「テレージェンシュタット・ゲッターの長老会議議長」は、ムルメルシュタイン博士 (Dr. Murrelstein) で⁵⁰⁾、彼は「1905年生まれで、ウィーン出身のラビであり学者であったが、(テレージェンシュタット) 解放後、ナチスへの協力の罪でチェコスロバキア当局によって逮捕され、証拠不十分のため1946年に釈放された。1989年、彼はローマで死没した」⁵¹⁾とされている。ジークフリートは、このムルメルシュタインと反目し合っていたとされるが⁵²⁾、ムルメルシュタインのような逮捕歴がなかったことから斟酌すると、テレージェンシュタットでナチスへの協力というような行為はしていなかったと考

えられる。

7. 新たに加わったクラブ役員 (Vorstand) (1945年9月)

先述したようにハコア・ウィーンは1945年6月にブルーメンフェルトを会長に、再建委員会を組織したが、1945年9月には書記にファインゴルト (Erich Feingold), 副会長にルドルファー (Franz Rudolfer), 会計にシュバルツ (Herbert Schwartz), 副会長にヴェンカート (Hermann Wenkart) の4名が新たに加わった⁵³⁾。

ファインゴルトは、アウシュヴィッツから帰還した水泳選手であった⁵⁴⁾。ルドルファーは、ナチスの強制収容所から帰還したホッケー選手であった⁵⁵⁾。

シュバルツとヴェンカートの二人は、ともにナチスの強制収容所からの帰還者であったが⁵⁶⁾、彼らの専門としたスポーツ種目は不明である。ヴェンカートは、ポーランドのオポーレ (Opole) に移送され、戦時下はかの地で生き延びていたが、ナチスの強制収容所で収容所指揮官 (Lagerführer) を務めていたとの批判もある⁵⁷⁾。

8. サッカー選手のラウシュとダイヒス (1945年9月)

アメリカ占領軍が発刊していた新聞 *Wiener Kurier* は、1945年9月11日にリンツでアメリカ第26歩兵師団選抜チームが LASK (Linzer Athletik-Sports-Klub) とサッカーの親善試合を行う予定であると報じていた。首都のウィーンだけでなく、ほかの都市においてもユダヤ人スポーツ関係者が活動を開始していた様子がうかがえる。その記事によると、以前、ハコアで右ウイングをしていたラウシュ (Rausch) というサッカー選手がアメリカ第26歩兵師団選抜チームに加わる予定とのことであった⁵⁸⁾。しかしながら、彼のファーストネーム及びナチ支配下における動静については不明である。なお、当時、オーストリア国内には、ハコア・ウィーンのほかに1919年創立のハコア・グラーツ (Hakoah Graz), 1926年創立のハコア・レオーベン (Hakoah Leoben), 1922年創立のハコア・インスブルック (Hakoah Innsbruck), 1946年創立のハコア・リンツ (Hakoah Linz) など、「ハコア」と名付けられたユダヤ人スポーツクラブが四つ存在していた⁵⁹⁾。アメリカ第26歩兵師団選抜との親善試合が開催されたリンツにもハコア・リンツというユダヤ人スポーツクラブがあったが、その創立は1946年であったことを考えると、ナチ支配下以前にラウシュが所属していたユダヤ人スポーツクラブは、ハコア・リンツでなかったことは確かである。しかし彼が、ハコア・ウィーンを含めて、どのハコアに所属していたのかは不明である。

1945年9月13日の新聞記事には、ダイヒス (Deiches) というハンガリー出身の若いゴールキーパーがナチスの強制収容所からウィーンに帰還し、ハコア・ウィーンの大きな戦力として期待されていた様子が報じられていた⁶⁰⁾。だが、彼のファーストネームやナチ支配下の詳しい動静はわかっていない。

9. A.バールの著作に記されたユダヤ人スポーツ関係者

1945年当時、ウィーンにいたユダヤ人スポーツ関係者を、1959年にA.バールがイスラエルのテル・アビブで発刊した『ハコア50年史-1909-1959-』の人名録をもとに通覧したところ、これまで見出すことができなかった3名の名前を確認することができた。

ダビドビッツ (Traudl Davidowitz⁶¹⁾、マンテル (Hans Mantel), メール (Willy Merl) の3名である。ダビドビッツは、1945年当時、水泳部門の再建に尽力した一人に数えられ、ウィーンでも屈指の女性スイマーであった。1948年と1949年には、100mと400mの自由形でウィーンとオーストリアのチャンピオンになっていた⁶²⁾。マンテルは、1945年当時、ハコア・ウィーンの幹部役員 (Funktionär) として⁶³⁾、メールは陸上競技部門の幹部役員として⁶⁴⁾、それぞれ再建に貢献していた。だが、ナチ支配下の動静については3名ともに不明である。

まとめにかえて

1945年5月から同年9月までの間に、ウィーンで何らかのスポーツ活動をしていたユダヤ人スポーツ関係者は、合計38名であった。そのうち11名のサッカー選手はファーストネームとナチ支配下における動静が一切不明であつ

た。ファーストネームが明らかになった27名を表のようにまとめた⁶⁵⁾。27名のうち、半数弱の13名に関するナチ支配下における動静が判明していない。また、強制収容所にいたことはわかっているが、どこの収容所か特定できないケースが6名あった。

おおよそナチ支配下における動静が判明しているケースが8名であり、アウシュヴィッツ絶滅収容所（ザクセンハウゼン強制収容所も含む）が2名、テレージエンシュタット強制収容所が2名、1944年からウィーンにいたのが2名、併合後、終始ウィーンにいたのが2名であった。

真っ先に取りあげなければならないのは、アウシュヴィッツ絶滅収容所から帰還したファインゴルトとシャインドルである。アウシュヴィッツは、「強制収容所と絶滅収容所を兼ねていた」⁶⁶⁾とされているが、「赤軍によるアウシュヴィッツの解放」は、1945年1月27日のことであった⁶⁷⁾。そのわずか数日前、同年1月18日には、「アウシュヴィッツの疎開始まる。ナチスは6万6千人の囚人がドイツに向かう『死の行進』を開始。親衛隊将校は、病気で『死

表1 1945年5月から9月にウィーンにいたユダヤ人スポーツ関係者

	氏名	定期刊行物による 在ウィーン確認年月日	ナチス期の居所
1	アルトマン	1945年7月22日	強制収容所（場所不明）
2	ベルガー	1945年6月14日	不明
3	ブルーメンフェルト	1945年6月14日	強制収容所（場所不明）
4	チャルフォン	1945年6月14日	不明
5	ダビドビッツ	不明	不明
6	ダイヒス	1945年9月13日	強制収容所（場所不明）
7	ファイヤ	1945年6月14日	不明
8	ファインゴルト	1945年9月	アウシュヴィッツ絶滅収容所
9	グリュン	1945年6月14日	不明
10	H.ヒルシュラー	1945年6月10日	ウィーン
11	R.ヒルシュラー	1945年5月20日	不明
12	ユングマン	1945年6月14日	ウィーン
13	A.コリツシュ	1945年8月5日	テレージエンシュタット強制収容所 リエカ（ユーゴスラビア）、グラーツ
14	S.コリツシュ	1945年8月5日	テレージエンシュタット強制収容所
15	ケーニツヒ	1945年6月14日	不明
16	ラウナー	1945年6月14日	不明
17	マンテル	不明	不明
18	メール	不明	不明
19	プラチェック	1945年6月14日	フランス国内、ノイエブレン・ゲシュタポ強制収容所、 ウィーン警察留置所
20	ラウシュ	1945年9月8日	不明
21	ライヒ	1945年5月4日	フランス国内、ドランシー収容所、ウィーン
22	ルドルファー	1945年9月	強制収容所（場所不明）
23	シャインドル	1945年6月14日	アウシュヴィッツ絶滅収容所、 ザクセンハウゼン強制収容所
24	シュバルツ	1945年9月	強制収容所（場所不明）
25	シュテルン	1945年6月14日	不明
26	ヴァインカート	1945年9月	オポーレ（ポーランド）、強制収容所（場所不明）
27	ヴァインター	1945年6月14日	不明

Neues Österreich, Wiener Kurier, Arbeiter Zeitung, Aufbau, S. Lucas, „...der erste und einzige Sammelpunkt für all die Entwurzelten: Die Wiederbelebung des SC Hakoah in der ersten Nachkriegsdekade, In: S. H. Betz, M. Löscher und P. Schönberger (Hrsg.): „...mehr als ein Sportverein: 100 Jahre Hakoah Wien 1909-2009. Innsbruck, Studien Verlag, 2009, A. Baar, 50 Jahre Hakoah 1909-1959. Tel-Aviv, Verlagskomitee Hakoah Tel-Aviv, 1959をもとに作成。

の行進』に参加できない者を射殺」⁶⁸⁾とされている。ファインゴルトとシャインドルが「死の行進」に駆り立てられたのか、あるいは1945年1月28日の赤軍による解放時にアウシュヴィッツにいたのか、定かではない。シャインドルについてはザクセンハウゼン強制収容所にもいたことになっているが、その時期がアウシュヴィッツの前か後かもわからない。もし仮に、彼らが1945年1月下旬頃にアウシュヴィッツから解放されていたとしたら、ファインゴルトは同年9月から、シャインドルに至っては同年6月にはウィーンにいて、ユダヤ人スポーツ関係者として活動していたことになる。アウシュヴィッツ絶滅収容所から生還してわずか5ヶ月程度で、スポーツ活動に従事していたことになる。さらにシャインドルは、ザクセンハウゼン強制収容所にもいたことが判明しているが、同収容所が「1945年4月22日、赤軍の一前進部隊によって解放された」⁶⁹⁾ことを考えると、彼は4月下旬に解放され、6月にはウィーンに帰還し、スポーツ活動に従事していたことになる。

次に見ておきたいのは、テレージエンシュタット強制収容所にいたコリッシュ兄弟である。テレージエンシュタットは、「絶滅収容所への移送の前の乗換駅として機能した。結局、収容者の大部分はアウシュヴィッツ（オシフイエンチム）に送られた」⁷⁰⁾とされているように、彼ら二人も命の危機にさらされていたことがわかる。テレージエンシュタットが解放されたのは、1945年5月8日のことであり⁷¹⁾、一番最後に解放された強制収容所であった。1945年8月には、コリッシュ兄弟がウィーンに姿を見せ、スポーツ活動に従事していたことからわかるように、彼らは解放からわずか3ヶ月ほどで活動を再開させていたことになる。

ファインゴルトとシャインドル、そしてコリッシュ兄弟らが、強制収容所や絶滅収容所から帰還し、わずか数ヶ月でユダヤ人スポーツ活動の再建に情熱を注いだ理由は、果たして何であったのか、今後の大きな解明課題である。そしてさらに大きな今後の研究課題は、ファーストネームの特定も含めてナチ支配下の動静が判明していない24名と、さらには強制収容所が特定できていない6名の追跡調査である。この調査に関しては、ルーカスらによるオーストリア抵抗文書館の資料活用に学んでいきたい。

付記

本稿は、JSPS科学研究費助成事業（基盤研究（C）（一般）16K01652）の成果の一部であり、ヨーロッパスポーツ史学会（CESH）第22回大会（2018年10月29日～31日、ボルドー（フランス））における口頭発表 "The stories of Viennese Jewish sportspersons who survived the Nazi regime" をもとにしている。

注

- 1) 芝健介『ホロコースト』中央公論社、2008年、まえがき ii。
- 2) 同上書、174ページ。
- 3) 同上書、164ページ。
- 4) 同上書、まえがき i。
- 5) F. Wilder-Okladek, *The return movement of Jews to Austria after the Second World War: With special consideration of the return from Israel*. The Hague, Netherlands, Springer Science+Business Media, B. V., 1969, p.111.
- 6) J. Moser, *Demographie der jüdischen Bevölkerung Österreichs: 1938-1945*. Wien, Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes (DÖW), 1999, SS.49-55.
- 7) M. Marschik, *Zwischen Zionismus und Assimilation: Jüdischer Fußball in Wien*, In: D. Dittmar, H. Anke und L. Britta (Hg.): *Überall ist der Ball rund: Zur Geschichte und Gegenwart des Fußballs in Ost- und Südsteuropa*. Essen, Klartext-Verlag, 2008, S.236.
- 8) S. Lucas, *„...der erste und einzige Sammelpunkt für all die Entwurzelten: Die Wiederbelebung des SC Hakoah in der ersten Nachkriegsdekade*, In: S. H. Betz, M. Löscher und P. Schölnberger (Hrsg.): *„...mehr als ein Sportverein: 100 Jahre Hakoah Wien 1909-2009*. Innsbruck, Studien Verlag, 2009, S.188.
Marschik, a.a.O., S.236.
- 9) M. Vogel, *Kleine Chronik Der Hakoah Wien-Teil 2: 1945-1995*, In: *Jüdisches Museum Wien (Hg.): Hakoah: Ein jüdischer Sportverein in Wien 1909-1995*. Wien, Jüdisches Museum Wien, 1995, SS.84-85.
- 9) ピーター・バルザー「反ユダヤ主義」、ウォルター・ラカー編（井上・木畑・芝・長田・永岑・原田・望田訳）『ホロコースト大事典』

- 柏書房, 2003年, 442ページ。
- 10) A. Suzuki, Re-establishment of the Jewish sports club SC Hakoah Wien(1945-1948, In: Denis Jallat(Texts collected): *Cultural Transfers in Sport: Origins and Diffusion of Sport in Europe*. Strasbourg, Histoire & anthropologie, 2021, pp.233-247.
 - 11) Lucas, a.a.O., S.185.
 - 12) 戦後のユダヤ人スポーツ関係者の一人としてマルティン・フォーゲル (Martin Vogel) がいる。彼はナチ支配下にもかかわらずウィーンにとどまり、生き延びた一人であることが判明しているが、陸上競技部門の再建に着手するのは1946年5月であった (Lucas, a.a.O., S.188)。研究対象期間からは外れるため、本稿では彼に言及していない。
 - 13) Lucas, a.a.O., S.186.
 - 14) M. Marschik, *Vom Idealismus zur Identität: Der Beitrag des Sportes zum Nationsbewußtsein in Österreich (1945-1950)*, Wien, TURIA+KANT, 1999, S.249.
 - 15) 強制収容所と絶滅収容所については、「1933年、ナチ党が政権を獲得した直後に作られた強制収容所は、敗戦に至るまで増加し、絶滅収容所の土台にもなった」(前掲『ホロコースト』, 164ページ) という関係にあった。
 - 16) M. Adler, *Sportberichterstattung als Instrument politischer Sozialisation, Presuasion, Manipulation: "Wiener Kurier" und "Neues Österreich" im Jahr 1945*. Diplomarbeit an der Universität Wien. 1994, SS.86-87.
 - 17) A. Baar, *50 Jahre Hakoah 1909-1959*. Tel-Aviv, Verlagskomitee Hakoah Tel-Aviv, 1959.
 - 18) "Fußballspiele vom 1. Mai", *Neues Österreich*, 04.05.1945.
 - 19) D. Forster und G. Spitaler, Die Fußballmeister: Lebenswege der Hakoah-Spieler der Zwischenkriegszeit, In: Betz, Löscher und Schönberger (Hrsg.), a.a.O., S.119.
 - 20) ドランシー収容所は、パリ郊外に設置された収容所で、「1942年3月から、最後の列車がフランスの地を離れた1944年7月までの間に、8万から9万のユダヤ人が100回に分けて、主にドランシーからアウシュビッツに送られた」(デイビッド・ワインバーグ「フランス」, 前掲『ホロコースト大事典』, 490ページ) とされている。
 - 21) D. Forster und G. Spitaler, a.a.O., S.121.
 - 22) D. Rabinovici, *Instanzen der Ohnmacht. Wien 1938-1945: Der weg zum Judenrat*. Frankfurt am Main, Jüdischer Verlag, 2000, S.19.
 - 23) ヴァイツルは、かのアドルフ・アイヒマンの部下と目された人物であった (Rabinovici, a.a.O., S.20)。
 - 24) "Ein Wiener Fußballspieler als Kriegsverbrecher hingericht", *Arbeiter-Zeitung*, 07.07.1949.
 - 25) "Sportler", *Neues Österreich*, 20.05.1945.
 - 26) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 14.06.1945.なお、ファーストネームの確認には、以下の文献を使った。J. Bunzl (Hrsg.) *Hoppauf Hakoah: Jüdischer Sport in Österreich. Von den Anfängen bis in die Gegenwart*. Wien, Junius Verlag, 1987, S.142.
 - 27) 先行研究及び引用した資料において絶滅収容所あるいは強制収容所の地名が特定されず、単にKonzentrationslager(KZ)と表記されていた場合は、以下「ナチス強制収容所」と表記する。
 - 28) Lucas, a.a.O., S.185.
 - 29) B. Ungar-Klein, Überleben im Versteck-Rückkehr in die Normalität?, In: A. Friedmann (Hrsg.) *Überleben der Shoah-und danach: Spätfolgen der Verfolgung aus wissenschaftlicher Sicht*. Wien, Picus-Verl., 1999, S.35.
 - 30) このユダヤ人代表者会議への評価に関しては、注意を忘れてはならないとヴィルダグーオクラデックは主張している。つまり、ナチスへの服従と協調は紙一重であったこと、そしてそこには高度な心理的関連性を考慮しなければならないことなどから、両者を分けて考えることはできないということである (Wilder-Okladek, op.cit., p.29)。
 - 31) "Platzek: vier Jahre KZ", *Arbeiter-Zeitung*, 08.08.1945.
 - 32) Forster und Spitaler, a.a.O., S.119.
 - 33) Forster und Spitaler, a.a.O., S.121.
 - 34) "Platzek: vier Jahre KZ," *Arbeiter-Zeitung*, 08. 08. 1945.
 - 35) Lucas, a.a.O., S.186.
 - 36) "Die wiedererstande Hakoah," *Neues Österreich*, 17. 07. 1945.
 - 37) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 24. 07. 1945.
 - 38) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 22. 07. 1945.
 - 39) Lucas, a.a.O., S.190.戦後、アルトマンが卓球オーストリア代表の監督であったのかどうか、オーストリア卓球協会に関する年史等の参考文献の確認はできていない。

- 40) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 05. 08. 1945.
- 41) "Nach Wien Zurückgekehrt aus Theresienstadt", *Aufbau*, 17. 08. 1945.
- 42) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 05. 08. 1945.
- 43) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 05. 09. 1945.
- 44) Forster und Spitaler, a.a.O., S.124.
- 45) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 05. 08. 1945.
- 46) Baar, a.a.O., SS.217-218.
- 47) Lucas, a.a.O., S.195.
- 48) Rabinovici, a.a.O., S.266.
- 49) a.a.O., S.268.
- 50) 前掲『ホロコースト大事典』, 145ページ。
- 51) 同上書, 346ページ。
- 52) Rabinovici, a.a.O., S.269.
- 53) Lucas, a.a.O., S.186.
- 54) S.C.Hakoah Wien, *45 Jahre S.C.Hakoah Wien 1909-1954*. Wien, S.C.Hakoah Wien, 1954, S.21. "Juden in Wien: Liste der aus Konzentrationslager zurückgekehrten", *Aufbau*, 08. 02. 1946. ファインゴルトの場合, *Aufbau*に掲載された彼の帰還報告は, 1946年2月8日であり, 1945年9月からは半年近くも経っている。この時間のずれについて, はっきりしたことはわからないが, おそらくは *Aufbau*側の調査や掲載が遅れたためと考えられる。以下, ルドルファー, シュバルツ, ヴェンカートにも見られる *Aufbau*掲載との時間的なずれは, 同じような理由と思われる。
- 55) "Juden in Wien: Liste der aus Konzentrationslager zurückgekehrten", *Aufbau*, 15. 03. 1946.
- 56) "Juden in Wien: Liste der aus Konzentrationslager zurückgekehrten", *Aufbau*, 29. 03. 1946.
- 57) Lucas, a.a.O., S.202.
- 58) "Amerikanisches-Team in Linz", *Wiener Kurier*, 10. 09. 1945.
- 59) T. Mayer, Orte der Begegnung und des Kampfes: Hakoah in den Bundesländern, In: Betz, Löscher und Schölnberger (Hrsg.), a.a.O., SS.48-61.
- 60) "Sportnachrichten", *Neues Österreich*, 13. 09. 1945.
- 61) ルーカスの書ではDavidowitschと表記されている (Lucas, a.a.O., S.190)。
- 62) Baar, a.a.O., S.166.
- 63) a.a.O., S.231.
- 64) a.a.O., S.233.
- 65) ただしこの表には, ウィーンではなくリンツでの活動が判明していたラウシュと, ファーストネームがわからない若手ゴールキーパーのダイヒスも加えてある。
- 66) ギデオン・グライフ「ガス室」, 前掲『ホロコースト大事典』, 142ページ。
- 67) リナト＝ヤ・ゴロドンツィク・ロビンソン「年表」, 前掲『ホロコースト大事典』, xlii。
- 68) 同上。
- 69) 前掲「ガス室」, 147ページ。
- 70) イェシャヤフ・A・イェリネック「ボヘミア・モラヴィア保護領」, 前掲『ホロコースト大事典』, 544ページ。
- 71) 前掲「年表」, xliii。